

〔鶉衣 前篇下〕旅賦

膳にはいなだの鱈かすかに、鯉のやき物大根葉のあえ物、壺皿の豆腐に、きざみ昆布の味も覺束なく、○下

〔槐記續編〕享保十七年三月廿四日、下加茂松林院^エ 御成、九ツ時御出、拙道^{○山科} 大膳御供、^{○中} 平^セ ドナフ カケカラシアン

〔臨時客應接〕茶漬の獻立、手近に有合の品にて、早く手輕仕組べし、大概左もあるべき歟、

春の部

平 ^はみ ^んべん ^ふす ^のまし ^とふ 猪口 ^かよ ^めな ^すま ^うす ^く小口切

〔記槐〕享保十一年霜月七日、大徳寺孤峯庵へ御成、^{○中} 菓子入 ^{四角唐物} 砂糖 ビイドロ大[○] ヨコ

〔槐記續編〕享保十七年三月廿四日、下加茂松林院^エ 御成、九ツ時御出、拙道^{○山科} 大膳御供、大猪口

ウドアチアエ 小猪口[○] ウコギヒタシモノ

〔俗耳鼓吹〕天明元年辛丑、小石川布施氏^{○註}の宅、江洲崎望陀欄の主祝阿彌を招請、獻立、^{○中} 略

菊手^{白南京} 猪口 やくみ打込

〔本朝文鑑^七〕醋徳頌

高九蚶

冬の生海鼠のほそがきには、煎酒の猪口とも、肩をならぶるならん、

〔和漢文操^六〕生海鼠箴

長鷺洲

易牙も海鼠腸の猪口にむかへば、ほとんど蘭麝の香にまどへり、

〔皇都午睡^{三編}上〕蕎麥に二種あり、カケ、モリも有り、カケはぶつかけ、モリは小青樓に入て、猪口に

だしをつぎ出すなり、